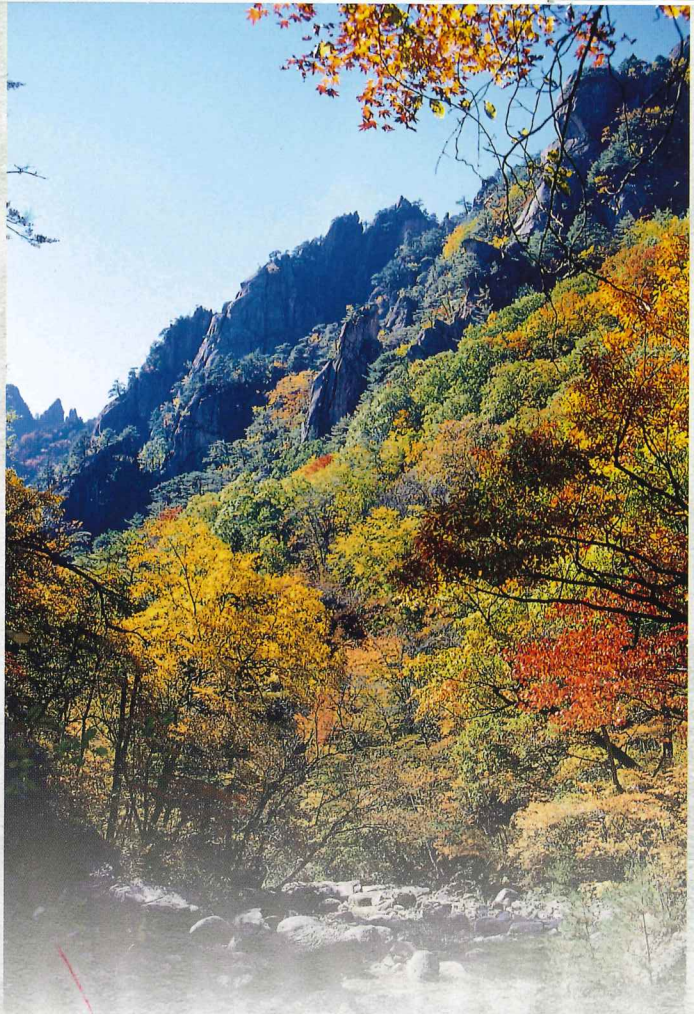
書道研究誌

書の光

10
2023



令和五年十月一日発行　毎月一回一日発行

Vol.662

宮城野書道会

漢詩を味わう

第171回

鹿柴（ろくさい）　王維

空山不見人　空山人を見ず
但聞人語響　但（ただ）だ人語の響きを聞く
返景入深林　返景（へんけい）深林に入（い）り
復照青苔上　復（ま）た照らす青苔の上

静まりかえった山、人の姿は見かけられない。
ただ人の声らしいものが、どこからか響いてくるだけだ。
暮れ方の光が深い林の中に差し込んできて、
木々の根元の苔を青々と照らし出している。

《鹿　柴》鹿を飼う園の柵。一説には作物を荒らされない為の防御柵。
《空　山》何もない山。ひと気のない山。
《返　景》夕日の照り返し。

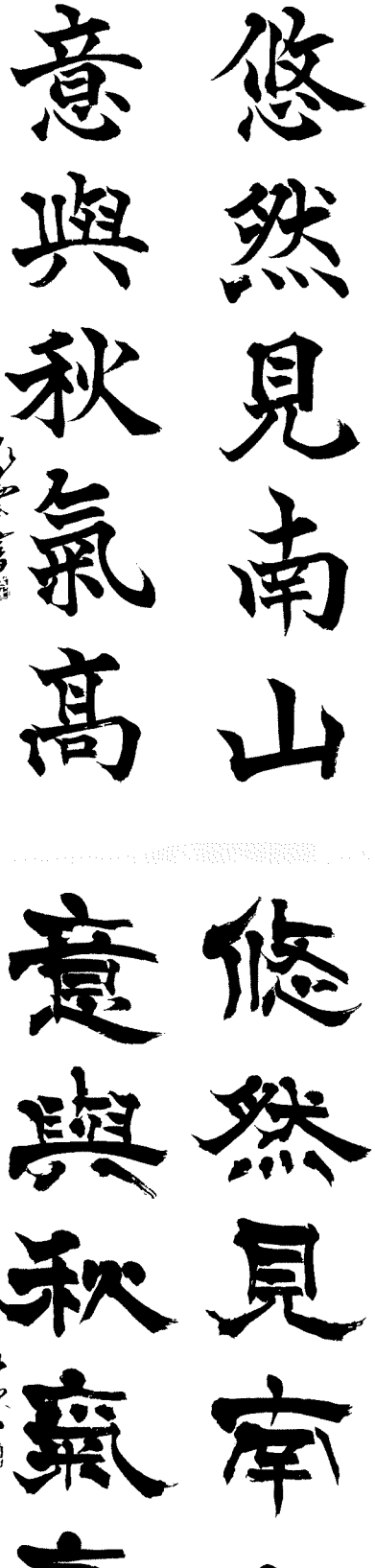
王維は唐時代の最盛期である盛唐の高級官僚で宮廷詩人です。一方で自然美とそれに融合して生活する歓びをうたう自然詩人ともいわれます。「詩仙」と称される李白と同じ西暦七〇一年の生まれで、「詩聖」と冠される杜甫より十一歳年上です。李白と杜甫は比較的晩年になってその詩名が知られましたが、王維は少年のころから詩名が知られ、また熱心な仏教徒でもありその詩風から「詩仏」とも呼ばれました。
この三人は同じように安史の乱によって翻弄された時代を生きた詩人です。李白は反乱軍討伐のための軍隊に参加しましたが、皇帝の指揮に従わずに逮捕されて処罰を受けました。また杜甫は反乱軍に捕らえられ監禁されています。王維も安史の乱に際しては賊軍に捕らえられ敵に仕えていて処罰されています。しかし王維は乱後に唐室の崩壊を悲しむ詩を作っていたことが幸いして、名誉を回復して尚書右丞まで昇進しています。
三人の詩風は大きくことなります。王維の詩は杜甫のように世を憂える詩は少なく、戦乱などによって虐げられた人間の悲惨をうたう詩もありません。または李白のようなダイナミックでエネルギッシュな詩も稀ですが、極めて鋭敏な感覚で自然を描写する美しい詩を残しています。
この詩は王維の別荘網川荘（もうせんそう）で詠んだ「網川二十景」のひとつで、「竹里館」とともに日本人によく知られている作品です。
空寂な人影のない山。微かに聞こえていた人の声の響きが止むと、山は一層の静けさに包まれます。夕刻となり傾いた陽光は赤みを帯びて、日中では光の届かない木の下に密集した苔の青さが、際立って美しく目に映ります。
日没直前の一瞬の光景をとらえた感性のひらめきと、夕日の赤と苔の青を対置して絵画的なイメージです。王維は画においても南画の祖として有名で、蘇軾がこの詩を評して「詩中に画有り」と言っていますが、まさに至言です。

参考文献：唐詩鑑賞辞典（東京堂出版）・中国詩人選集（岩波書店）・漢詩の事典（大修館書店）

白髪三千丈　愁いに縁りて箇くの似く長し　知らず明鏡の裏　何れの処よりか秋霜を得たる

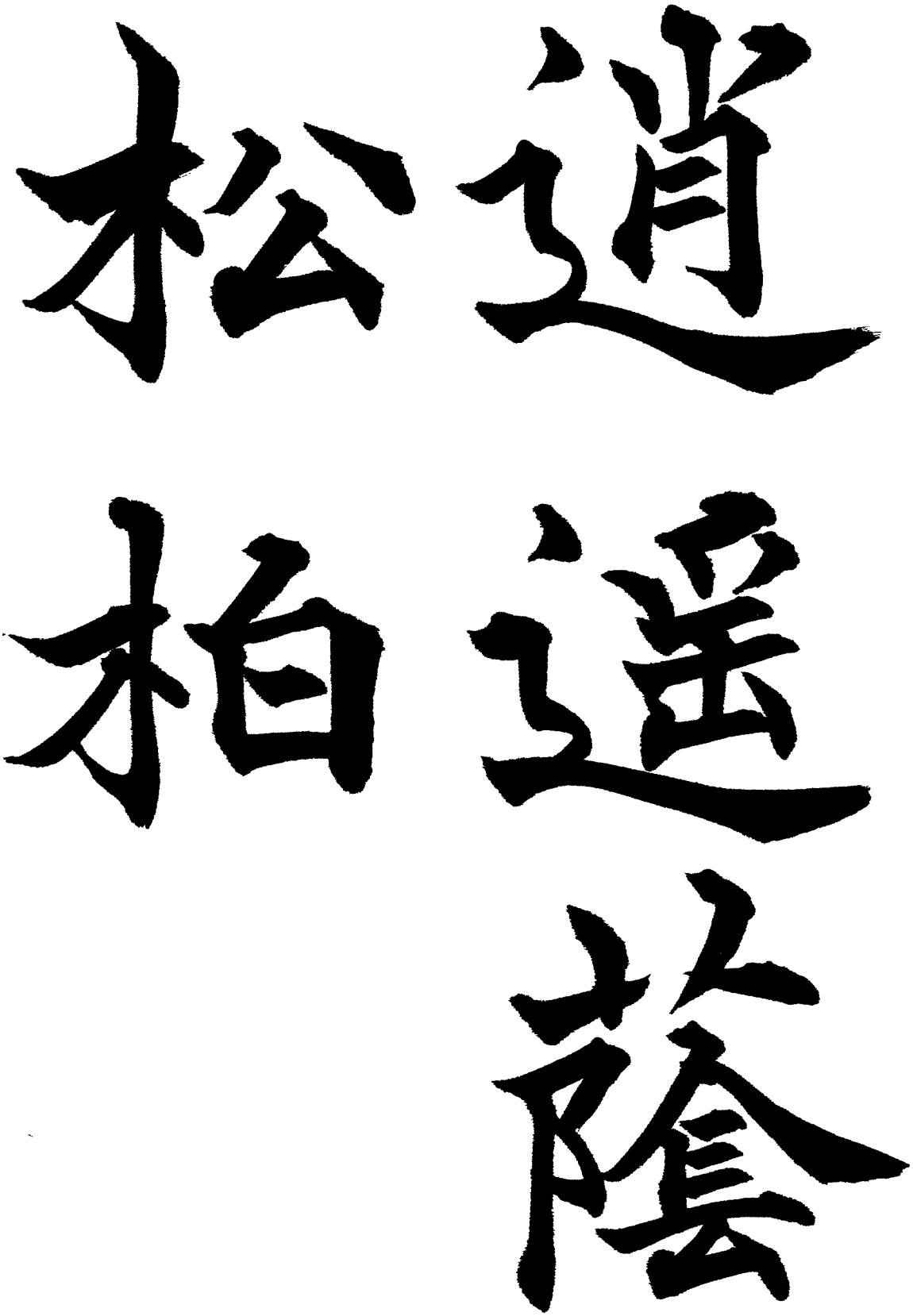
《大意》白髪は三千丈もあろうか、積もる愁いのためにこんなにも長くなってしまったのだろう。よく磨き上げられ美しく澄んだ鏡の中、秋に降りる霜にも似たこの白さは、いったいどこで身につけたものだろうか。（李白詩・秋浦歌）

悠然として南山を見る　意秋気と高し



《大意》悠然として南山を望見する、その人柄は秋気の如く清くして高い。（蘇軾）

※陶淵明詩「飲酒」に和してその人柄を称えた句



読み　逍遥（しょうよう）して松柏（しょうはく）に蔭（いん）う（散歩しては松や柏の木陰で休む）

佐藤象雲書

一般部規定課題出品について

・規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
・規定課題（楷書）の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

王維詩
「藍田山の石門精舎」（前半）

落日山水好
落日　山水好し
漾舟信歸風
舟を漾わせて　歸風に信す
玩奇不覺遠
奇を玩んで遠きを覺えず
因以緣源窮
因りて以て源を緣ねて窮む
遙愛雲木秀
遙かに雲木の秀でたるを愛し
初疑路不同
初めは路の同じからざるかと疑う
安知清流轉
安んぞ知らん　清流轉じて
偶與前山通
偶々前山と通ずるを
捨舟理輕策
舟を捨てて輕策を理む
果然愜所適
果然として適する所に愜う
老僧四五人
老僧　四五人
逍遙蔭松柏
逍遙して松柏に蔭う

（後半に続く）

行　書

草　書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

隷　書

次号課題

朝梵林未だ曙けず

ペン字部課題　（10月31日〆切）

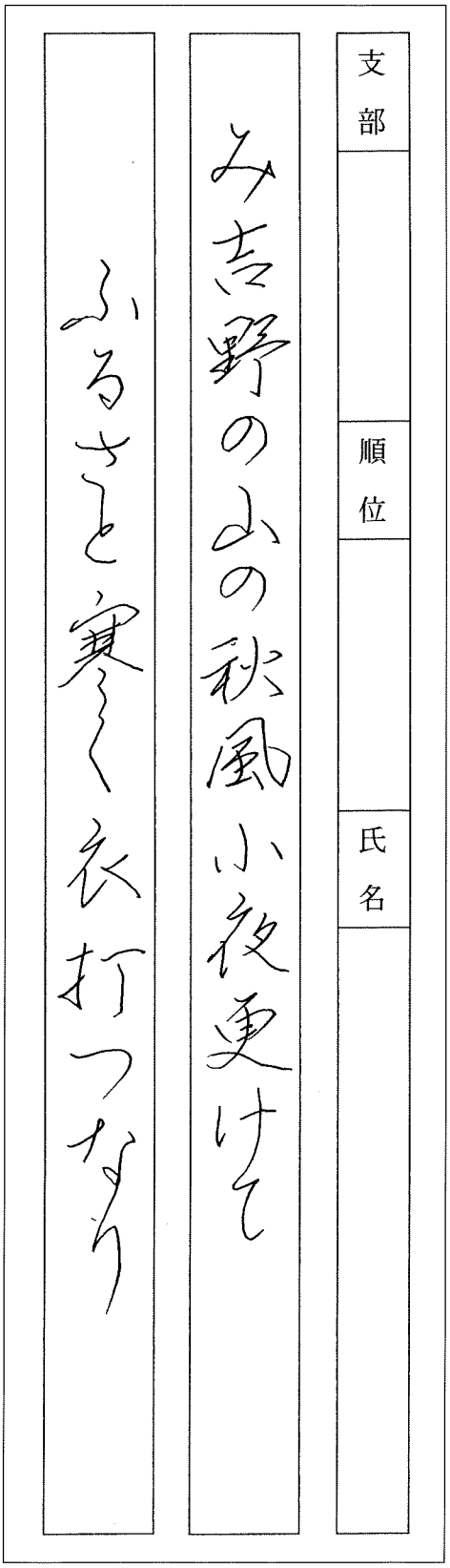
細字部課題　（10月31日〆切）

（両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと）

佐藤象雲書

音　ガイコウソウヨク　シュウネツガンリョウ

略解　身体が垢で汚れた時は入浴して清潔にし暑さに耐えがたい時は涼しくあらんことを願う



新古今集　参議雅経

和泉溪石先生書

慶を求む

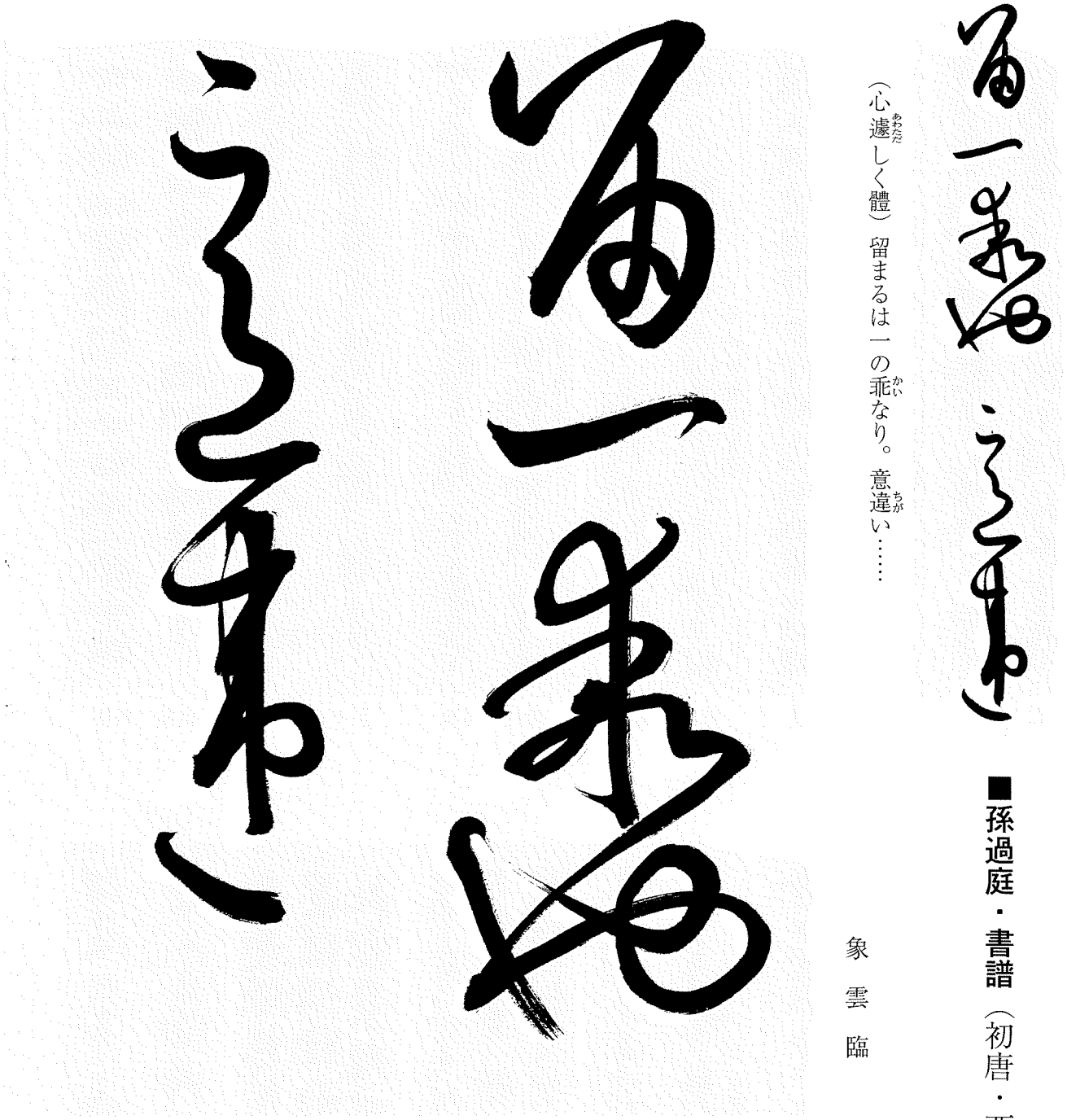
象雲臨

■褚遂良（ちょすいりょう）・雁塔聖教序（がんとうしょうぎょうのじょ）（初唐・西暦六五三年）の臨書 (74)

『求慶』

雁塔聖教序は「三蔵聖教序」と「述三蔵聖記」に二碑からなります。「三蔵聖教序」は太宗の御製で、仏教教理の概略を述べて玄奘が西域から持ち帰った経緯とその労苦を称え、経典の翻訳事業の意義を述べています。「述三蔵聖記」は、当時皇太子だった高宗が、父太宗の仏教に対する聖徳を述べ、玄奘の訳経事業を称賛する内容です。

本碑の臨書も「三蔵聖教序」の終盤となり、一旦区切りとして次回で最後とします。今月は「求慶」の二文字を臨書します。雁塔聖教序のしなやかな線質の把握に留意して、精緻な結体ながらも雄大な風趣を再現してください。



（心遽しく體）留まるは一の乖なり。意違い……

■孫過庭・書譜（初唐・西暦六八七年）の臨書

(55)

象雲臨

『留一乖也意違』

書譜は長文のため、このコーナーでは文を抜粋して臨書していますが、今月は前回からの続きです。この六文字は文節を跨いでいるため、六文字で意味は成しませんが、文字の疎密や高低さらに字幅の変化があります。またはじめの四文字は筆が円転して字内の空間が明るく確保されています。続く「意違」は線がしなやかで字幅を意識的に抑えているようです。字を直立させて転折の強弱の細かな観察が必要です。

草書体は変化が多彩で線の可動領域が広い書体ですが、一方で簡略化された結体のため、ちょっとした転折の違いでも誤字になる可能性があります。その点で書譜は多彩な変化を見せながらも、王羲之書法に基づいた正当な結体を誇る草書の基本的な古典ですので、細部しっかりと学んでいきたいものです。また、草書体を覚えるために、字典などを利用して類型を学ぶことが大切ですが、本誌の細字で学んでいる三体千字文の学習が有益です。